

(3) 実行内容 (DO)

現状の対応策として、演習・学内の基礎実習のグループ編成は、成績が近似している学生から構成されるようにしており、学生の能力に応じた演習、実習指導を行えるようにした。言語聴覚総論Ⅳ（秋卒：留年学生対象）、旧カリキュラム対象学生（2年以上の留年4年生6名）の基礎実習に、アクティブラーニングを導入した。

(4) 点検評価 (check)

能力別グループ編成（能力の均一化）により、各グループ内の課題・問題点が分散することをおよぼす程度防ぐことができ、演習・実習の際のグループ内の課題・問題点が以前と比較して明確になった。各グループの能力により、最低限の到達目標からさらに上位の到達目標のグループ別設定が容易になった。

言語聴覚総論Ⅳ（秋卒：留年学生対象）のアクティブラーニングでは、極めて良好な試験結果が得られた。

能力別グループ編成、アクティブラーニングは他の科目においても積極的に広げていく必要がある。

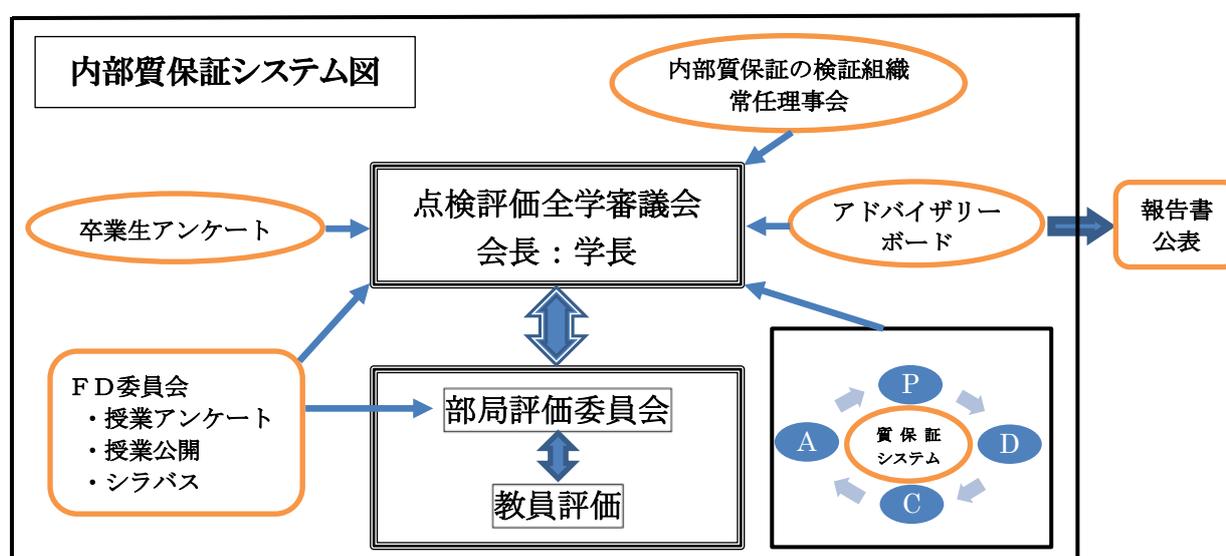
(5) 改善方策 (Action)

旧カリキュラム対象学生（全員4年生で、2年以上の留年）の基礎実習にアクティブラーニングを導入したが、必ずしも良好な結果が得られたとは言えなかった。出席不足による失格者、合格の評点が得られない学生が認められ、アクティブラーニング開始学年の早期化（早期からアクティブラーニングという学習様式を経験する必要性）の検討、適応学生の選択（特に、多年度の留年生に適応可能か？）に今後、留意が必要である。

今後、アクティブラーニングの他に、一部の講義・演習に取り入れることを開始した反転授業の効果について検証する予定。

4. 内部質保証システム

点検評価に係る基本方針に基づき、各システムの関連性を図表化すると以下のとおりである。これらが機能することにより本学の内部質保証の検証となる。



PLAN (到達目標・方針等) ⇒ DO (実態・実行) ⇒ CHECK (点検・評価) ⇒ ACTION (改善策の策定)